21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ②

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

天理教のフランスにおける可能性

まず、前回の原稿でパリ天理日仏文化協会はパリ 4 区のダンフェールロシュロー地区にできたと書いたが、4 区ではなく 14 区と訂正しておく。

ここからはフランスにおける天理教の展望について書くつもりなので、個人的な見解が増えてくることをお許し願いたい。

おそらく天理教に限らず、世界中の宗教の多くが信徒数の減少に頭を悩ませているのではないだろうか。日本でも伸びなやみを見せている天理教が、同じように経済的先進国であり、民主主義思想を掲げるフランスで伸びる余地はあるのか。ないと断言する方がおそらく簡単だろう。これを書いている筆者も、現代フランスで天理教が加速度的に伸長していく姿は想像しにくい。しかしそれでもなお、天理教の美徳がフランスに確かなプラスをもたらすと確信している。とはいえ、それを伝える方法に革新的な工夫が必要であることも確かである。

そもそも、現代のフランス人は宗教が信者数を増やすことに躍起になる理由が分からないだろう。いや、分かったとしても同意はしないだろう。人類平和のような高邁な理想を掲げる宗教が信者を増やして大きくなった結果、集団内に醜い権力闘争が起こり、経済力がつけばおよそ清廉な精神世界を体現する団体とは言えない欲まみれの行動を露見し、洗脳のテクニックを駆使して人々を支配する指導者たちが現れ、果ては救済の対象である人間さえも自らの利益のために殺してしまう団体まで生まれてきた。近年は比較的新しい破壊的カルト集団にそうした警戒心が働くが、フランスは伝統宗教のカトリックと対峙して自由の獲得に挑み続けてきた。ライシテの闘争で見てきたように、非宗教国家としての共和国たる強い意志をもっている。その歴史を学べば、現代フランス人は宗教が大きな支配力・影響力を持つことに反発心を持つだろうと想像できるのである。

いや、それが本当にいいものであれば、受け入れられるかもしれない。つまり、個々人の自由意思が尊重され、非科学的ないかがわしい行動もなければ組織のために何かを強要されることもなく、そこに集う人々が醜く争う姿を見せずに、純粋に精神力を高め合っている姿勢を示すことができれば、だ。それももちろん不可能ではないだろうが、今の天理教が信者獲得を前面に押し出して活動した場合、まずはカルト教団のように受け取られ拒否反応を示されるだろう。フランスのカルト対策の有名な政府機関に「カルトに対する警戒と共闘のための省庁間委員会（筆者訳）」（Mission interministérielle de vigilance et de lutte contre les dérives sectaires, Miviludes）というものがある。そのホームページにはカルトの定義として、以下のように書かれている。

> 思想、意見、信教の自由から逸脱し、公の秩序や法律、規則や基本的人権、人々の安全や個々人の自我と生命を尊重しないもの。その性質や活動にかかわらず、組織された集団または独立した個人がさまざまな技術や圧力を駆使し、心理的または身体的な従属状態を作り出し、それを維持し、または利用することで、その人から自由意志を奪い、その人自身、その家族や知人、または社会に有害な結果をもたらすものである。
> （https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/quest-ce-quune-d%C3%A9rive-sectaire、筆者訳）

また、カルトかどうかを見分ける基準として、以下の 10 の目安を示している。

1．精神的に不安定な状態にする
2．法外な金銭の要求をする
3．もとの生活環境から脱け出させようとする
4．身体的な損傷を与える
5．子供を執拗に勧誘する
6．反社会的な言動が見られる
7．公序良俗の乱れが見られる
8．重大な訴訟問題を抱えている
9．不自然なお金の流れの可能性がある
10．公的機関への介入を模索している

（https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/quest-ce-quune-d%C3%A9rive-sectaire/comment-la-d%C3%A9tecter、筆者訳）

人々はこれらの条項を基準に、カルトかどうかを見極めるよう促されている。この委員会は、上記どれか一つ明確に当てはまる事項があってもカルトとは言いきれないが、1 に関してはどのカルト集団にも当てはまるとしている。

天理教ヨーロッパ出張所についてで言えば、上記の 10 の項目において当てはまるものはないし、カルトだと言われる理由もないだろう。ただ 1 と 2 については注意が必要だ。まず 1 について天理教には「おさとし」という言葉がある。簡単に言えば心を入れ替えるために行う口頭での教導行為だ。だが、心持ちが悪いから病気になると言われれば、精神的に不安になる人もいるだろう。2 については「おつくし」がある。金銭で尽くすという意味だ。自発的なお供えとして教団に寄付をするのは問題ないが、助かるためにお金でお供えしなさいだとか、教会にお布施をすれば徳が積めるなどと説くのは、経済的奉仕を強要する行為とみなされるだろう。しかし、厳しい言葉をかけられて反省したすかることもあれば、金銭をなげうつことで精神的な安定を得られる人がいてもおかしくはない。本来問題になるのは、一時的な行いだったり当人に自由裁量の余地が残ったりしている場合ではなく、継続的、強制的な逸脱行為が集団内で常態化しているケースのはずだ。しかしながら、信者数が少ないフランスでは、仮に一布教師の行いが逸脱行為として受け止められた場合、母数の少なさから天理教全体に悪意を持たれる可能性が高い。フランスにおいて天理教で人々にたすかってもらいたいと思うのであれば、自分の経験則や成功体験だけを絶対的に押し付けるのではなく、客観的、科学的、総合的に物事をとらえて相対的に対応する力が求められるだろう。

［参照］

「対カルト運動の省庁間共闘警戒委員会サイト」https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/（2023 年 3 月 1 日時点）